

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 言語科学 専攻		
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・言語科学専攻・博士課程前期課程2年	熊谷 允岐 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	鳥飼 慎一郎 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	英語語彙学習の方略とその分析及びそれに基づく教材開発の提案		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 言語科学専攻 博士課程前期課程2年	熊谷 允岐	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 150,301円 / (採択金額) 162,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

正規の教育課程以外で行われる日本人英語学習者の語彙学習方略の分析と、より効果的な語彙学習教材の提案を目的とした。日本人英語学習者は特に受験を目的として、教室外でも語彙の学習に努めているのが現状である。その時に用いられるのがいわゆる大学入試用の英単語集である。自律性の高い学習者は、そうでない学習者より語彙習得が促進されると指摘されており、今日の語彙学習方略における意義は自律的な学習者を育成することであるとしている。本研究ではそのような環境において、①学習者はどのような方略を用いて語彙を学習しているのか、②彼らの用いている語彙学習教材、つまり英単語集がどのように編集され、学習者の語彙習得に寄与しているのか、あるいは寄与していないのかを語彙学習方略の観点から比較し、分析を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[英語語彙習得] [教材分析] [語彙学習方略]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1) 研究背景と目的

本研究は、正規の教育課程以外で用いられる日本人英語学習者の語彙学習方略 (Vocabulary Learning Strategies, 以下, VLSs) の分析と、より効果的な語彙学習教材の提案を行った。これらの目的、意義を達成するために、本研究では以下の研究課題を設定した。

- (1) 学習者はどの程度の VLSs に馴染みがあり、それらを使用しているのか。またそれら学習者の個人差要因、英単語集への認識、関わり方およびニーズにはどのような違いがあるか。
- (2) 学習者にとって馴染みがあり頻繁に用いる VLSs, 馴染みがなくあまり用いない VLSs, 馴染みがあるにも関わらずあまり用いない VLSs, 何気なく使ってしまった VLSs にはそれぞれどのようなものがあるか。
- (3) 学習者が用いる英単語集にはどのような、また何種類の VLSs が導入されているか。
- (4) 学習者が用いる英単語集に掲載されている見出し語には何種類の、またどの程度 VLSs が導入されているか。

2) 研究方法・分析

本研究では研究課題 1, 2 に対しアンケート調査、3, 4 に対して教材分析を行った。

アンケート調査

本研究では Schmitt (1997), Gu and Johnson (1996) などをもとに全 74 項目で構成されたウェブアンケートを用いて調査を行った。被験者は東京都内の私立大学 1 年生 156 人で、日本の中高で 6 年間の普通教育を受けた学習者を対象とした。被験者の熟達度は入学時に全員が受けた TOEIC スコアによって定義されることとし、全体平均は 490 点である。アンケートは大きく 2 つのセクションから作成されている。第 1 セクションでは、1 つの VLSs に対して、(a) 見聞きしたことがある度合い、(b) 実際に使っていた度合いの 2 つを 4 件法で数値化し、クラスター分析で学習者を分類した。従来の研究では多くが VLSs の「使用」のみに焦点を当ててきたが、本研究では方略に対する「見聞きした度合い」も加えた。見聞きしたことがある方略と、実際に使用していた方略は必ずしも一致せず、「知っていても使っていない方略」あるいは「方略だと認知せず、何気なく使ってしまった方略」も明らかにするために、2 つのスケールを設けた。第 2 セクションでは、(a) 語彙学習に対する態度、(b) 英単語集へのニーズについて 4 件法および複数選択式で調査した。第 1 セクションを元に分類された学習者に対し、第 2 セクションで明らかとなった被験者の動機付け、学習不安、英語熟達度、英単語集への工夫、英単語集の購入経緯、そして英単語集へのニーズを元に比較を行った。特に前者 4 つに関しては、分散分析を用いて有意差の有無を検討した。

教材分析

分析対象となる英単語集はアンケート結果および市場調査をもとに 5 冊を選定した。選定した教材に対し、Schmitt (1997) の示す分類を元にどのような VLSs が組み込まれ、またどの程度見出し語彙に導入されているかを分析した。

研究成果の概要 つづき

3) 研究結果

研究課題1に関して、クラスター分析の結果、学習者は4つのクラスターに分類された。VLSsを見聞きしたことがある度合いが高いほど、それに比例して使用する度合いも上昇していた。全体的に見るとVLSsを使用する度合いが高いクラスターほど動機付け、学習不安、英単語集に対する工夫の仕方に上昇傾向があることが明らかとなった。特に、最もVLSsを使う度合いが高いクラスターと最も低いクラスター間では、語彙学習に対する動機付け、学習不安、英単語集に対する工夫の仕方に統計的有意差も見られた。また購入経緯、英単語集に対するニーズもクラスター間で特徴の違いが見られた。ただし、クラスター間の英語熟達度には差が見られなかった。

研究課題2に関して、馴染みがありよく使われるVLSsには文脈の類推や英和辞典の使用が挙げられた。馴染みもなくあまり使われないVLSsには方略自体が複雑、または抽象的なものが散見された。馴染みがあるにも関わらずあまり用いられないVLSsにはフラッシュカードや英英辞典など、学習者にとって認知負荷が重い方略、または方略の準備自体に手間がかかるものが見られた。よく使われているが、あまり意識的には用いられていないVLSsには未知語の無視、カタカナ語の使用が挙げられた。

研究課題3, 4では、分析対象の英単語集から計11種類のVLSsが確認された。しかし、英単語集の見出し語に限定すると、用いられているVLSsが減少することが明らかとなった。また先行研究では学習を阻害する可能性を示唆したVLSsが用いられていることも確認された。全体としては練習問題の導入が少ない教材が多く見られた。

4) まとめ

本研究では教師、学習者、そして教材の3つの視点から今後の課題を示唆した。教師は市販英単語集のより綿密な把握と学習者へのサポート、そして意識化されていない、または扱いが難しいVLSsの積極的な指導が必要である。学習者はより幅広い情報を元に、そして最終的には自身に合った英単語集を自主的に追求していく必要がある。教材は今後、練習問題のより前向きな導入を検討していくことが期待される。また、教材自体にもVLSsの有効性、効果的な使用法がより明確かつ詳細に記載される必要があると思われる。本研究は今後の語彙指導及び英単語集開発に重要な示唆となるものであると期待される。

< 参考文献 >

- Gu, Y., and R. K. Johnson. (1996). Vocabulary learning strategies and language learning outcome. *Language Learning*, 46 (4), 643-679.
- Schmitt, N. (1997). Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp. 199-227). Cambridge: Cambridge University Press.

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④学会発表

「英語語彙学習の方略とその分析およびそれに基づく教材開発の提案」2016年9月25日、第22回日英・英語教育学会研究大会(口頭発表)、聖徳大学.